

北海道におけるグリーンツーリズムの歴史といただきますカンパニーの取り組み

株式会社いただきますカンパニー 代表取締役 井田芙美子

1. グリーンツーリズムとは

1960年代、ヨーロッパで農村振興の為にはじまり、不況対策として施行された「バカンス法」によって普及しました。イタリアではアグリツーリズム、イギリスではルーラルツーリズムと呼ばれています。

日本のグリーンツーリズムは、農山漁村余暇法の中で「主として都市の住民が余暇を利用して農村に滞在しつつ行う農作業の体験その他農業に対する理解を深めるための活動」と定められています。

グリーンツーリズムの基本は、農山漁村に住む人々と都市に住む人々との交流です。農産物直売所、農家レストラン、農村の生活・文化の体験など農林水産業を中心とした、生活の営みにふれる体験の全てと言えます。



2. 日本の政策

1992年に農林水産省により「グリーンツーリズム」という言葉が提唱され、1994年に「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」（略称「農山漁村余暇法」）が制定されました。その後、農林漁業体験民宿業者の登録制度の一層の活用を図ることなどを目的として、2005年6月に法律が改正され、同年12月から施行されています。

グリーンツーリズムに関わる規制緩和の例：

- ・農家民宿が自ら提供する運送、宿泊、農業体験を販売、広告することは、旅行業法に抵触しない(1993年)
- ・農家民宿等を営む農業者が、自ら生産した米を原料として濁酒を製造する場合、最低製造数量(6k1)を適用しない。(2003年)
- ・客室面積 33㎡→農家民泊の場合は 33㎡に満たない場合でも簡易宿泊所の許可を得ることが可能(2005年)
- ・農林漁業体験時に提供される食事が、自炊や農林漁業者等との共同調理の場合には、食品衛生法に基づく営業許可が不要であることを明確化(2010年)



3. 北海道での取り組み

1990年頃、WTOへの不安から、農業者による勉強会が盛んに開催され、農家レストラン、コテージ営業、農業体験、修学旅行生の受け入れ等が始まりました。2001年、鹿追町で北海道ツーリズム大学が開校し、全国の先進事例を学ぶ機会が提供されました。2005年には、北海道グリーンツーリズムネットワークとして、全道の実践者が交流する組織が立ち上がりました。北海道ツーリズム大学卒業生からは、北海道の体験をコーディネートする(株)北海道宝島旅行社や、農業体験を事業化した(株)いただきますカンパニーが生まれています。

4. いただきますカンパニーの取り組み

(1) 背景

本州や札幌近郊では規模の小さい農家が副収入としてグリーンツーリズムに取り組む事例が多くありますが、十勝地方では、専業農家が多いため、農業と観光の連携には広がりが見られなくなっていました。一方、日本最大の食糧基地である十勝に来て、農業にふれたいと考えている潜在的な旅行者がいることも確信していました。



グリーンツーリズムが広まらない理由は、農作業が多忙で、副収入を必要としていないためです。農業、農村の現状を伝えたい想いを持つ農家がいることもわかっていました。そこで、農家の代わりに畑を案内するガイド業を立ち上げることにしました。

(2) 開業までの経緯

1999年 帯広畜産大学入学(農業経営、農場実習、自然ガイド、サマーキャンプボランティア)

2003年 北海道ツーリズム大学受講

2004年～少年自然の家、海外留学、十勝観光連盟、農村ホームステイ事務局

2007年 保育園での農産物直売所開始

2011年 子育てサークルでの農業体験イベント開始

2012年 いただきますカンパニー開業

(3) 開業後の経緯

「農村景観を案内するガイド事業」とは決まっていたのですが、日本ではガイドに費用を支払う習慣がないため、定着までに時間がかかりました。資金も少ないため、当初は畑を会場にしてコーヒーなどの軽食を提供する臨時飲食業から始めました。これが「畑カフェ」として話題になり、初年度から1000名以上が来場。広大な農村風景の中で、そこで採れた食材を堪能

できるとあって SNS やメディアで多く取り上げて頂き、開業2年目には全道版の旅行雑誌等でも取り上げてもらえるようになりました。それでもガイドツアーへの参加は少なく、経営は苦戦していました。2年目の夏から、帯広市の委託事業を受けて人材育成を行えることになり、本格的に「畑ガイド」の育成に着手。ツアーは、ガイドと一緒に畑を歩いて、そこで採れたものを食べる、ということから、「農場ピクニック」と名付けました。広報宣伝活動も積極的に行った結果、3年目からは全国からお越し頂けるようになりました。4年目は、畑への病害虫の侵入を防ぐために、不特定多数を受け入れる「畑カフェ」を終了し、ガイドツアーに事業を絞り込みました。結果的に「農場ピクニック」は2000名を突破し、新たに定期観光バスのルートにも選定され、会社は初の黒字化。5年目の2016年は台風の影響もあり参加人数は落ち込みましたが、海外からのお客様が倍増するなど、お客様の属性が多様化しました。小さくとも継続していける仕組みが整ったと感じています。

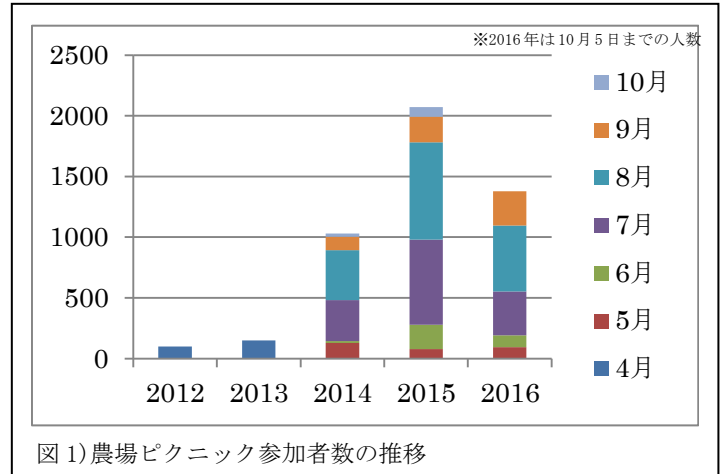


図1)農場ピクニック参加者数の推移

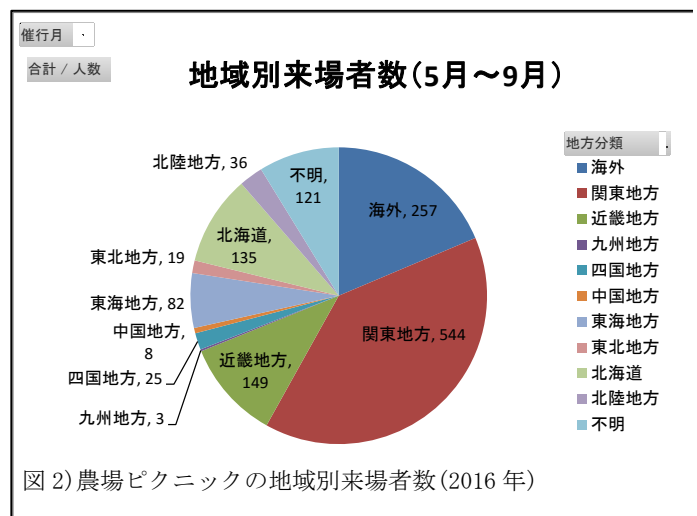


図2)農場ピクニックの地域別来場者数(2016年)

(4) 農場ピクニック

a. ツアー概要

農場ピクニックは、観光農場ではない生産現場をガイドと一緒に歩き、そこで採れたものを食べるツアーです。

一番の特徴は、農家ではなく専門のガイド(畑ガイド)が案内することです。農家は時期や天候によって作業量が変わるため、人間の都合に合わせることは難しいのです。ガイドの存在により、農家にとっても、お客さまにとっても、ストレスなく体験が受け入れられるようになりました。人員を割けない農家でも、体験を受け入れられる日本初の仕組みとして、全国から注目を浴びています。

もう一つの特徴は、収穫体験をメインとしていないことです。もちろん、できるだけ収穫体験ができるように努力していますが、収穫ができなくとも、一面の青い小麦畑の中を歩き、そこで採れた小麦で作ったパンを絶景の中で頂くのは、ここでしかできない特別な体験です。私たちは、収穫体験だけではない、ありのままの農業の姿を見て頂くことが一番大切と考えています。そのため、とうもろこしのツアーであっても、小麦畑やじゃがいも畑、ペットやお庭など、その農場にあるものは全てご案内しています。

ツアーは、午前、ランチタイム、午後と1日3回実施をし、前日17時までの予約で2名様から40名様まで対応しています。小さな子どもを連れた家族でも、団体ツアーのお客さまでも、十勝の農村風景を楽しんでもらいたいと考えてのことです。地元ベーカリーのサンドイッチや地元農協の冷凍枝豆など、地域で既に商品化されているものを組み合わせた簡単な昼食にすることで、準備時間や調理施設がなくとも地元食材の食事を楽しめる仕組みにしています。



b. 参加者の声

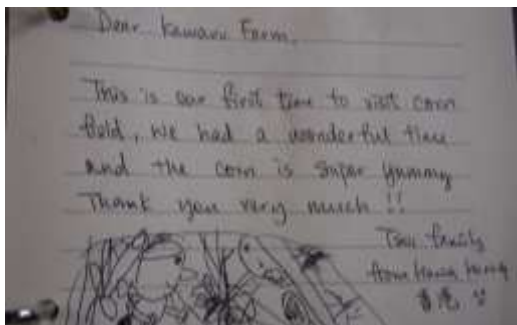
・大きな畑でいろいろな野菜をつくっているのにおどろきました。とうもろこし畑が台風の影響で曲がっているものが多かったですが、太陽に向かって一生懸命成長している姿が力強かったです。丁寧な説明で、ガイドさんの説明がわかりやすく、楽しい体験をすることができました。ありがとうございました。

・色々な野菜を見られて3才の娘も興味しんしんでした。特にアスパラはあんな風になっていることを初めて知りました。とうもろこしは生でかじるとフルーツのように甘くてジューシーでびっくり！ゆでるとさらにおいしくてびっくり！！かじると汁がごくごく飲めるほどでした。台風被害もあり大変だと思いますが頑張って下さい^^

・はじめてじゃがいもをほりました。わたしがほったじゃがいもは1つに13こくらいついていてびっくりしました。大きいのもあれば小さいのもあってどっちもとってもおいしかったです。こんなにひろいはたけははじめてみました。ポテトおいしかったです。これからもがんばってください。

さくら♡





・じゃがいもはそうぞう以上にとれてすごかったです。こんどはちがうやさいをほってみたい。そしてガイドさんのせつめいもよかったです。トラクターなどにもものってかんげきしました。 高知県

・ Although it is raining, my family still enjoyed the farm tour. We enjoyed picking the vegetables. Thank you for the tour! From Singapore

・ You have a most beautiful and wonderful farm! We enjoyed very much our tour of your farm. The lunch has been a highlight of our trip. We wish you a good harvest every year!

c.農場ピクニックの仕組み

農家は場所の提供、いただきますカンパニーはツアーの企画・営業・予約受付、畑ガイドはお客様のご案内と、それぞれの役割を分担して担うことで、毎日3回のツアー受け入れを実現しています。今までは、農家自身が体験の受け入れを行う場合が多かったですが、この仕組みにより、農家の負担が減ったため、大規模な専業農家でも体験の受け入れが可能になりました。

畑ガイドは、元農協職員や元教員など、地域の年配者や主婦の方など約15名が登録しています。冬の間に行う研修に参加し、試験に合格した方に、有償でガイドとして活躍してもらう仕組みです。そのため、少ない事務局体制でも多くのお客さまのご案内が可能になりました。

(6) 農家との関係



日々の生産活動で忙しく過ごしながらも、作物がどうやってできているのか知って欲しいと願う農家も多くいます。そんな方にとっては、「これこそが自分のやりたかったことだ」と言って協力して下さる方もいます。また、加工品を作っているために、少しでもその宣伝になればと関わって下さる方もいます。私たちは農業や農産物の魅力を発信する役割を担っています。発信力を理解し、期待して下さる農家さんとは、自然と出逢うことができますし、良い関係を続けることができてきました。当然、受け入れに際して協力してもらうことも多々ありますので、状況

次第では農場を移動することもあります。農家にとって体験機会の提供は本業ではないため、無理のない範囲で協力してもらうという姿勢が重要だとも思っています。

(7) 人材育成

11月~12月に畑ガイド希望者を募集し、1月から研修が始まります。3か月の間に、農業基礎、伝え方講座、安全管理など、ガイドに必要な知識や技術を学びます。3月の筆記試験に合格した方は、5月から実地研修が始まり、6月のインターンを経て7月から実際のガイドを行います。仕事が入った時だけお願いする契約ガイドですが、プロガイドとして活躍して頂けるよう、責任を持って育成しています。



(8) 課題とこれから

これまで順調に参加者数が伸びてきましたが、2016年は台風の影響もあり落ち込んでしまいました。開業当初は東京近郊からのお客様がほとんどでしたが、全国各地、海外はシンガポール、マレーシア、タイ、台湾など東南アジアを中心に各国からお越しいただくようになりました。また、ご家族連れがほとんどだった状況から、女性グループ、若いカップルなど、お客様の層が広がりました。それをふまえても、年間平均2000名、最大3000名、というのが十勝で行う農場ピクニックの限度と感じています。しかし、有名な観光地ではなく、多額の設備投資がなくとも、今ある農村資源だけで2名を通年雇用できる仕組みが整ったのは画期的なことだとも考えています。

そこで、これからはこの小さなビジネスモデルを他地域でも展開できるよう働きかけていく計画です。今冬には、初めて外部向けの畑ガイド研修を開催することになりました。既に感心を持つ地域があり、相談を受けています。北海道各地で、農林漁業を地域の人が案内する仕組みが整い、旅行者がどこへいっても気軽に地域の一次産業にふれ合えることが、今の目標です。

井田美美子 (いだ ふみこ)

株式会社いただきますカンパニー 代表取締役

十勝の「ありのままの生産現場」を伝える「畑ガイド」／消費者と生産者をつなぐ「農村ツーリズムコンサルタント」

2児の母。10歳で「生きた鶏を処理して食べる」体験をする。出産を経て2012年3月開業、翌13年5月会社設立。生産現場を見学できる「畑ガイドツアー」が話題を呼び、首都圏から多くの家族旅行者が訪れ感動の声が寄せられている。起業背景は、食を通じて子どもたちが未来へ生き抜くチカラを育むこと。その一心で観光・農業の現場連携を推進してきた。「子どもが作った今日のごはん」といった我が子の成長を伝える日々の発信に母親層から支持が集まる。



MEMO